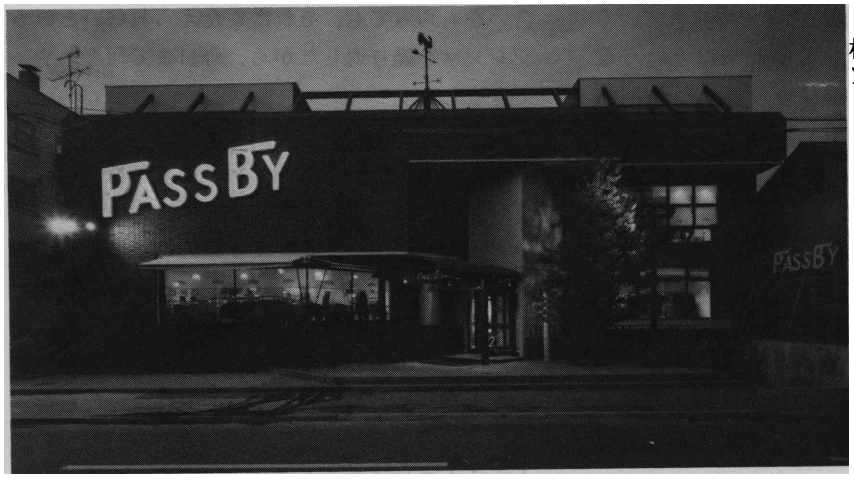
特集　カラマツ・セメントボード

セメントボードを使ってみて

ショップ・インテリアとしての素材

㈱インテリアサービス
取締役営業部長　石川良一



札幌裏参道の
ファッションビルの完成

共通路の床に張った
カラマツ・セメントボード
（ビル内部）

〈はじめに〉

私とカラマツ・セメントボードとの出合いは，我が社との関連企業からのこんな一言から始まりました。

「店舗建築の世界でも，かつてのような床と言えば塩化ビニルやカーペットが幅をきかせていた時代は過ぎて，いまや木質系床材が新しい商品として頭角を現しはじめている。このような現象に敏感に反応しなければこの業界で生きていくのはなかなか難しい。ましてや北海道という環境を考えると，木材の豊富なうってつけの地域であるし，きっと何か面白い，目新しい素材が埋もれているはず。今から本腰を入れてアプローチすべきだ。」

こんな言葉がこの素材とのかかわり合いの始まりでした。

しかし，一般市場を探索したところで，大量生産ラインが目立つものの，新傾向の素材など見るべきものはほとんどありませんでした。そんな時に林産試験場という機関を耳にし，訪れる機会を得たわけです。

カラマツ・セメントボードという，この素材を一目見た時に，それのもつ雰囲気と質感に，素材に飢えたデザイナーにとっては格好のスパイスとなりうるだろうと確信しました。無機的素材の代表としてのコンクリートと，カラマツの木片チップが合成されたこのボリューム感ある表情は，まさに新素材として十分な要素を持ち合わせています。まして店舗建築業界のような素材を意匠としてとらえたり，容易に新しいものにチャレンジできる分野では様々な利用法があるだろうと……。

昨今のデザインは多様化の時代でありながら，デザイン思考の類似性もあり，比較的均一な傾向にあるのが否めない事実であります。これらの要因の１つとして新素材開発の研究が後手回りをしているところにあります。

北海道という地域性を考えたときに，二次加工された独自な製品のない第三国的な存在のなかで，この様なすばらしい素材が林産試験場の研究のなかから生まれたことは，大変に意義のあることですし，今後大切に育ててゆかなくてはならないと考えております。

このボードを使いはじめてから１年余りの月日がたちましたが，まさに見よう見まねでボードを使い，いくつかの仕事を仕上げてまいりました。林産試験場でしか造れず，しかも手造りと同様で少量生産であるという，現代社会では通常ありえないものだけに，デザイナーや関連業者から引き合いをもらっても，それにこたえられないというジレンマを繰り返しながら，今日まで何とかやってきました。

関東や関西方面からの引き合いも多く，面くらいながらも少しづつ実績をかさね，今秋には民間で企業化されるというニュースに，大いに希望をもつと同時に，今後ますます精力的に取り組んでいかねばならないという使命感をおぼえます。

そして，この素材の本当の魅力は何か，それはひとりひとりの人のとらえ方によって感じ方は異なるだろうし，この素材を使う対象によっても違ってくると思いますが，この素材の本質的ならしさというものは不変のものであると思います。

時代のニーズが我々を振り向かせてくれた，この新しいジャンルに大きな目標を掲げて，戦略的に取り組んで行きたいと考えます。

〈施工と加工について〉

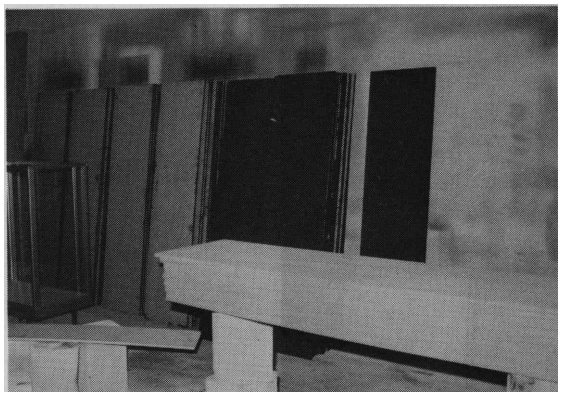
ショップ・インテリア用材料として加工，施工する場合について，気の付いたことを述べます。

ボードはあらかじめ，店のデザインに合わせてカットサイズ，色を決めますが，ボードの幅は15～90㎝までのサイズをつかいました。ボードの端が欠けることがあるので，面取りを行います。

ボードの染色（写真①）は床材という使用が多かったので，やや落着いた暗い色が選ばれました。カットサイズと染色で，素材としてはいろいろな流れのものが設計可能でした。今後はフローリングやタイルタイプに色々な染色パターンを用意しておくことも検討しています。ある施工では染色パターンを３タイプ取り，ちどり模様に張るものがあります。張り方は真っすぐに張ったり，45度のななめ

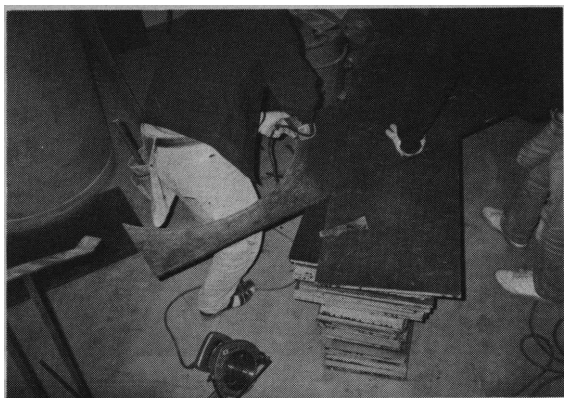
張りをしたりしました。

床基礎は必ずしもレベルが取られているわけではないことが多く，たる木で根太を組みコンパネを張ってレベルを取りました。ボードの厚さは均一ですが，レベルによって結果的に片面が浮いたり沈んだりした個所も出て，神経を使いました。床への張りつけは，コンパネにエポキシ系樹脂で

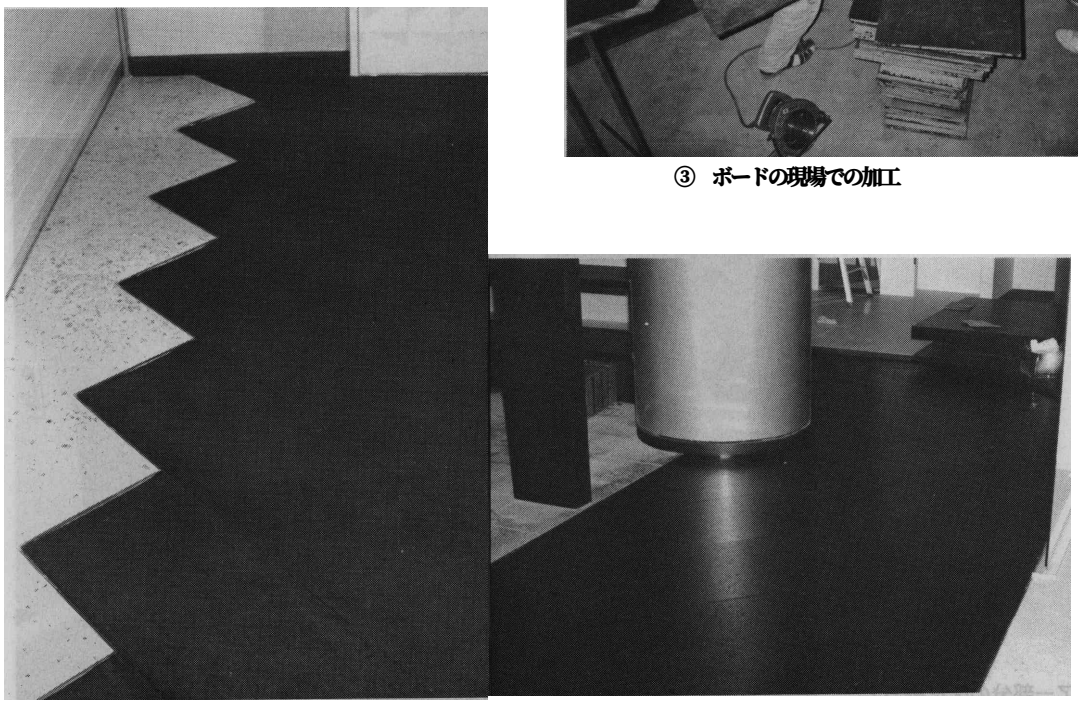


① ボードの染色

② コンクリート床基礎に釘で直接張る



③ ボードの現場での加工



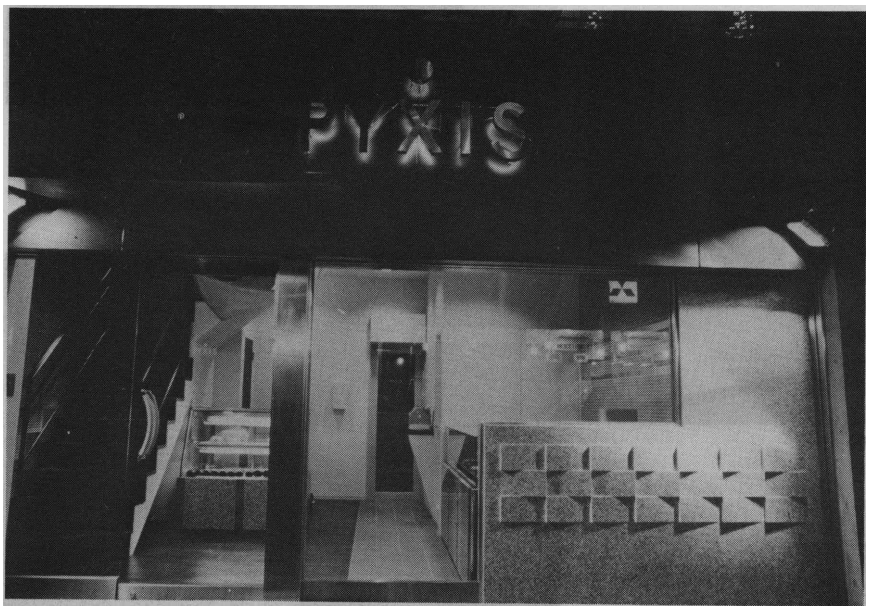
④ ウレタン仕上げ塗装した床

1985年10月

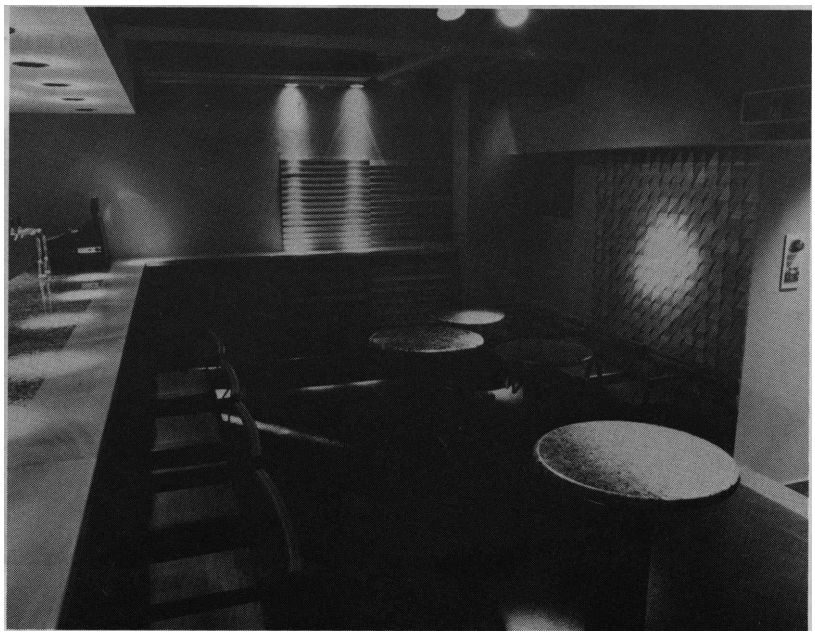
接着し，さらに釘を留めるのが一番オーソドックスですが，コンクリート基礎に直接ダボで留めてみたものもあり（写真②），双方あまり変わりない結果となりました。釘はそれ自体をデザインとして生かす方法としのばせておく方法とがありますが，これも全体のイメージで決めました。

ショップの中の構造は複雑で柱の形もさまざまです。角柱であればあまり問題ありませんが円柱の場合にはボードを円形に切断しなければならず多少苦労しました（写真③）。施工時に切断を伴うときには粉じんが多く出るため，仕上げ時には十分に清掃して，ウレタン系や油性ペイントで仕上げを行いました（写真④）。

これまで施工したもの，施工中のものを紹介し

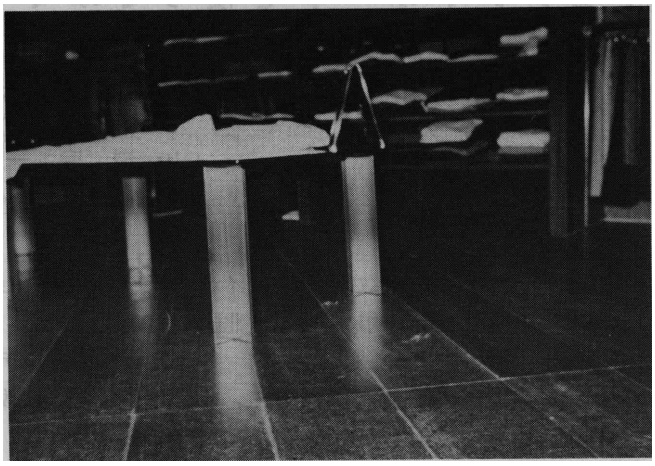


東京西麻布の店舗



フロアー部分の床に張った
カラマツ・セメントボード

ますと，札幌パスバイビル〔デザイン，及村工芸社（写真1頁）〕，東京・西麻布ピクシス〔デザイン，㈱ＶＩＮＣＩ（写真4頁）〕，旭川オクノビル内モガ〔デザイン，㈱アダムス(写真右,下)〕，施工中のものは，横浜ＳＯＧＯ，東京原宿（以上デザイン，㈱ＶＩＮＣＩ),釧路，佐世保，東京（以上デザイン，ジェニファーオークレ），函館パスバイ，大阪パルコ（以上デザイン，及村工芸社）などでいずれも今年中に完成の予定です。



旭川市内デパート　ファッションブティック　フロアーの使用

本稿は，カラマツ・セメントボードを床材に使う，というユニークな発想をされた筆者に，特にお願いして執筆いただいたものです。（編集委員会）